

やまなし  
医療最前線  
流れをつくる  
県立中央病院から

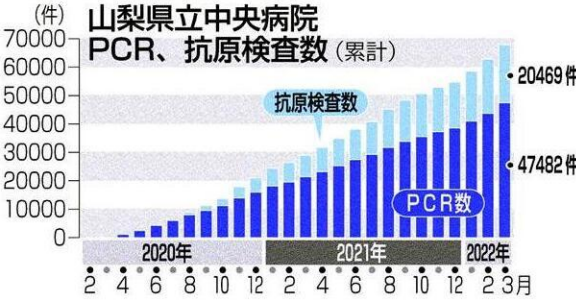
〈246〉



雨宮 健司  
主任臨床検査技師

遺伝子関連検査の体制拡充に生かされ、新型コロナウイルス対応の大きな力となった。同センター・検査部ゲノム検

山梨県立中央病院はがんの遺伝子変異に基づいて最適な治療を施す「ゲノム医療」を探究するゲノム解析センターを持つ。解析センターで培ったノウハウは自院で完結する



資料の雨宮健司主任臨床検査技師は「解析センターの存在が迅速、正確な検査体制の構築につながった」と話してい

## ゲノム解析センター 研究推進

## コロナ検査の精度高める

解析センターはゲノム医療の研究を推し進めようと2013年に開設された。集まっ

こぎつけた。最新の全自動PCR機器2種類や抗原検査も導入され、夜間・救急問わず24時間の検査体制を整えた。

制を維持する原動力となっている。このほか、同院は県内全域から検体を集めて変異株の追跡も行っている。全ゲノム解析、スクリーニング検査は3千件を超え、最近では今年2月、オミクロン株の派生型「B.A.2」を県内で初めて確認し、県に報告した。

たデータは数多くの論文となり、ゲノム医療の進歩に貢献している。解析センターで得られた知見や技術を臨床に生かす場がゲノム検査科で、18年4月に同院検査部内に設けられた。

特に注意を払っているのは感染していないにもかかわらず陽性になる「偽陽性」の問題。「解析センターで培った検査技術があるからこそ、正確な判断が可能」と雨宮さんは強調する。外部機関によるチェックも受け、世界基準の精度管理を実現しているとい

こうして同院が世に送り出した新型コロナウイルス関連の論文は16本。研究を主な役割とする解析センターの知見が臨床の場で生かされ、得られたデータが再び研究を前に進める好循環が生まれている。

同院が新型コロナウイルス対応に着手したのは、県内で感染者が確認される前の20年1月

下旬。解析センターが中心となり新型コロナウイルスの全ゲノム情報を入力して検査精度の検証を行い、2カ月足らずで

検査能力の充足は院内感染対策にもつながり、通常診療体制

昨年年度末時点での検査数はPCRが4万7482件、抗原が2万469件を数える。

患者に還元できる方法をこれからも探っていきたい」と話している。

雨宮さんは「ゲノム医療・検査は日々進歩している。臨床のニーズを聞きながら

発熱外来でのPCR検査に

策にもつながり、通常診療体制

第2、4木曜日に掲載し